令和３年度
介護予防・日常生活圏域ニーズ調査結果

令和４年６月

五所川原市地域包括支援課

【目次】

1　調査の目的 2

2　調査対象者 2

3　調査対象者の抽出方法 2

4　調査方法 2

5　調査項目 2

6　調査期間 3

7　回答状況 3

8　市の概況 3

8-1　地域ごとの高齢化率 3

9　調査結果 4

10　考察 14

11　結論 14

【調査概要】

1　調査の目的

日常生活圏域ごとに、地域の高齢者の状況を把握することで、地域課題を把握（地区診断）し、地域の目標を設定すると同時に、介護予防事業に誘導すべき高齢者のスクリーニングに活用。

2　調査対象者

65 歳以上の者のうち要介護（要介護 1～5）を除いた市民 3,000 人（令和 3 年 6 月 1 日現在）

3　調査対象者の抽出方法

層化無作為抽出法

4　調査方法

調査対象者へ郵送・返信方式による調査票の配布・回収

5　調査項目

必須項目 35 問+オプション項目 29 問

設問内容	設問内容の意図
あなたのご家族や生活状況について	基本情報
からだを動かすことについて	運動器機能の低下・転倒リスク・閉じこもり傾向を把握
食べることについて	口腔機能の低下、低栄養の傾向を把握
毎日の生活について	認知機能の低下、IADL 低下を把握
地域での活動について	ボランティア等への参加状況・今後の参加意向
たすけあいについて	うつ傾向を把握
健康について	知的能動性・社会的役割・社会参加の状況などを把握
認知症にかかる相談窓口の把握について	認知症に関する相談窓口の認知状況を把握

6　調査期間

令和 3 年 8 月 1 日～令和 3 年 8 月 23 日

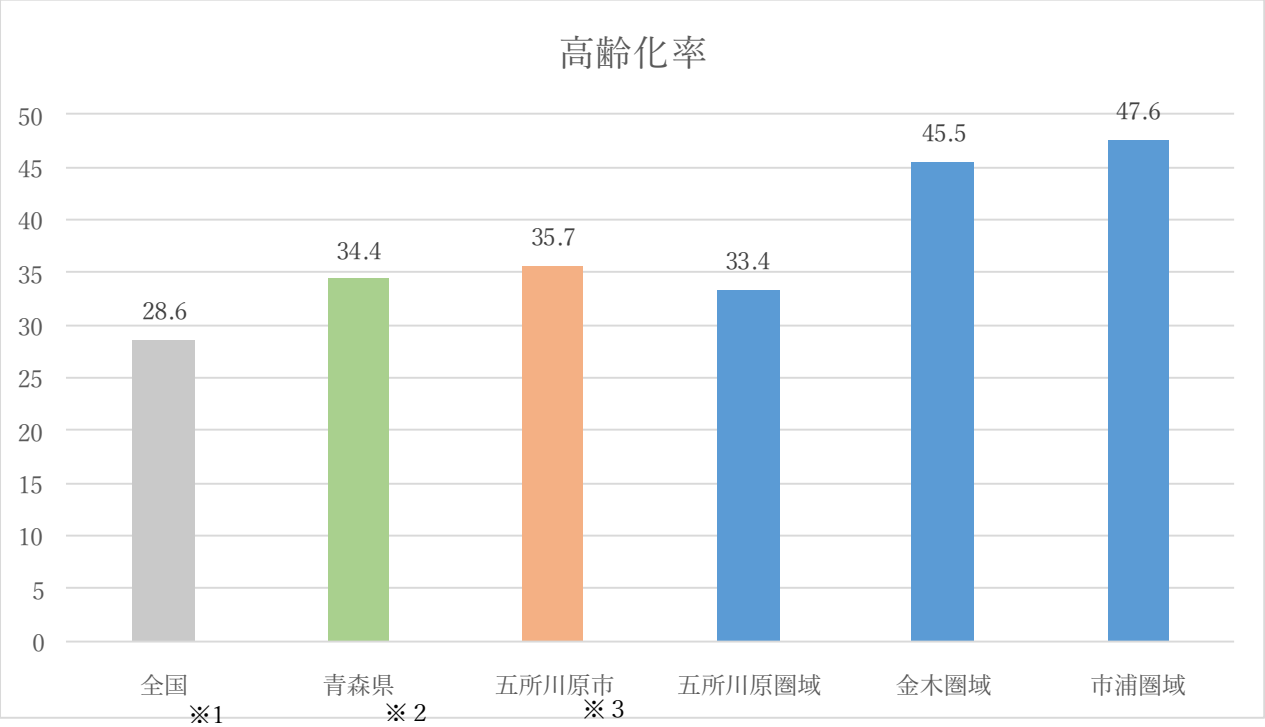
7　回答状況

回答数（率）　2,064 人（68.8%）

8　市の概況

8-1　地域ごとの高齢化率

現状：金木圏域（45.5%）、市浦圏域（47.6%）の高齢化率が全国や県と比較して高い。



※１　出典先：総務省統計局　令和 2 年国勢調査人口等基本集計結果（R2.10.1 時点）
※２　出典先：青森県企画政策部　令和 3 年青森県推計人口年報（R3.10.1 時点）
※３　出典先：五所川原市市民課調べ（R3.10.1 時点）

9　調査結果

厚生労働省　地域包括ケア見える化システム「介護予防・日常生活圏域ニーズ調査指標」より

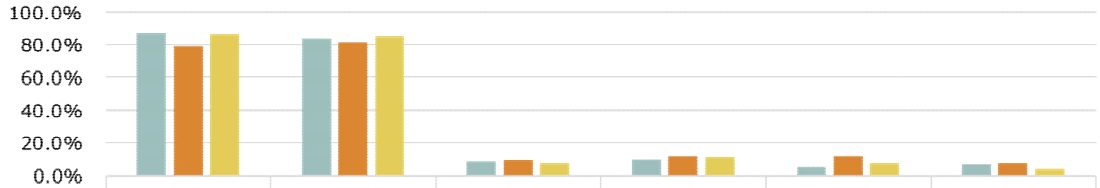
指標項目	年度比較（全体）		R2年度圏域別			R3年度圏域別		
	R2	R3	五所川原圏域	金木圏域	市浦圏域	五所川原圏域	金木圏域	市浦圏域
運動器機能リスク高齢者の割合	19.2	**17.1**	18.4	22.5	17.8	**17.1**	**17.9**	**13.4**
栄養改善リスク高齢者の割合	6.6	**6.8**	7.0	5.9	3.0	**7.1**	**7.1**	**1.0**
咀嚼機能リスク高齢者の割合	37.9	**39.3**	37.4	39.0	42.6	**39.2**	**40.6**	**37.1**
閉じこもりリスク高齢者の割合	27.3	**29.3**	25.0	32.9	42.6	**28.3**	**29.3**	**46.4**
認知症リスク高齢者の割合	47.2	**47.8**	46.2	50.7	48.5	**47.1**	**52.5**	**41.2**
うつリスク高齢者の割合	41.4	**40.4**	42.8	37.4	35.6	**39.9**	**41.2**	**45.4**
IADLが低い高齢者の割合	7.8	**9.9**	6.9	11.0	7.9	**9.5**	**12.4**	**6.2**
転倒リスク高齢者の割合	33.4	**32.0**	32.3	36.5	39.6	**32.1**	**33.2**	**25.8**
ボランティア等に参加している高齢者の割合	9.1	**9.7**	9.1	8.8	10.9	**9.6**	**9.5**	**13.4**
スポーツ関係のグループやクラブに参加している高齢者の割合	9.4	**9.2**	10.4	6.1	6.9	**10.5**	**4.5**	**7.2**
趣味関係のグループに参加している高齢者の割合	17.3	**17.7**	17.7	16.9	12.9	**18.6**	**15.3**	**12.4**
学習・教養サークルに参加している高齢者の割合	4.8	**5.1**	5.0	4.1	5.0	**5.0**	**5.3**	**6.2**
地域づくりへの参加意向のある高齢者の割合	46.4	**46.6**	46.9	42.6	54.5	**47.4**	**40.6**	**56.7**
地域づくりへの企画・運営（お世話役）としての参加意向のある高齢者の割合	31.6	**31.0**	31.2	31.8	37.6	**31.7**	**25.6**	**39.2**
独居高齢者の割合	22.8	23.2	23.9	18.7	22.8	23.1	22.4	26.8
夫婦二人暮らし（配偶者65歳上）世帯の割合	29.2	28.5	29.2	28.8	29.7	27.6	32.7	25.8
配食ニーズありの高齢者の割合	6.8	8.7	6.4	8.6	5.9	8.6	9.2	8.2
買い物ニーズありの高齢者の割合	5.6	6.6	5.2	7.9	3.0	6.5	7.7	4.1
介護が必要な高齢者の割合	6.9	6.4	6.7	8.1	5.9	5.9	9.0	5.2
介護が必要だが現在は受けていない高齢者の割合	10.1	9.3	9.5	12.8	6.9	9.0	10.6	9.3
現在の暮らしが苦しい高齢者の割合	36.1	37.9	35.7	38.1	33.7	38.2	36.7	39.2
情緒的サポートをくれる相手がいる者の割合	96.4	**94.7**	96.1	97.3	98.0	**94.6**	**94.2**	**96.9**
情緒的サポートを与える相手がいる者の割合	93.4	**91.6**	93.0	94.4	96.0	**91.5**	**91.0**	**94.8**
手段的サポートをくれる相手がいる者の割合	93.5	**92.2**	93.4	93.9	94.1	**92.0**	**92.6**	**93.8**
手段的サポートを与える相手がいる者の割合	85.9	**84.5**	85.6	87.6	83.2	**84.4**	**85.0**	**85.6**
主観的健康観の高い高齢者の割合	73.1	**73.5**	73.0	73.0	76.2	**73.5**	**72.3**	**79.4**
主観的幸福感の高い高齢者の割合	43.0	**39.4**	42.8	43.9	42.6	**39.4**	**40.9**	**34.0**

上記太字20指標項目のうち

※　　前年度と比較し、数値割合が低下した項目

※　　前年度と比較し、数値割合が上昇した項目

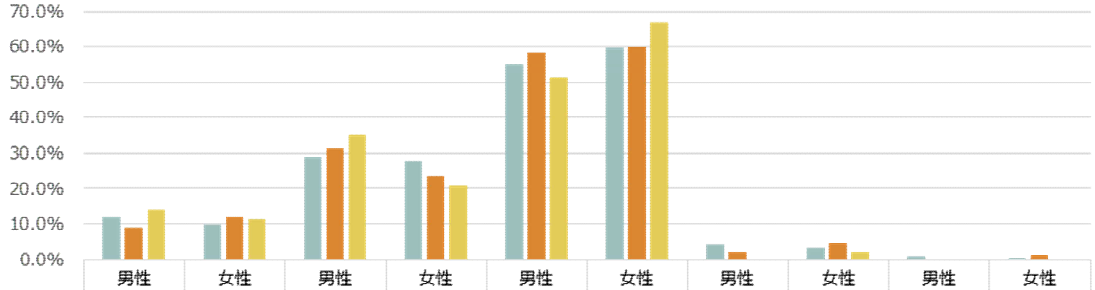
あなたは、普段の生活でどなたかの介護・介助が必要ですか　N=2024



	介護・介助は必要ない		必要だが、現在受けていない		受けている	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
五所川原圏域	86.6%	83.6%	8.5%	9.6%	4.9%	6.7%
金木圏域	78.8%	80.9%	9.4%	12.0%	11.9%	7.2%
市浦圏域	86.0%	84.9%	7.0%	11.3%	7.0%	3.8%

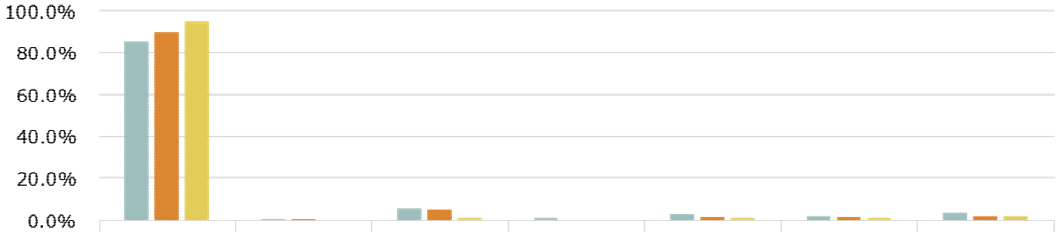
約１割の方が普段の生活の中で介護・介助が必要だが、現在は受けていない。

現在の暮らしについて　N=2041

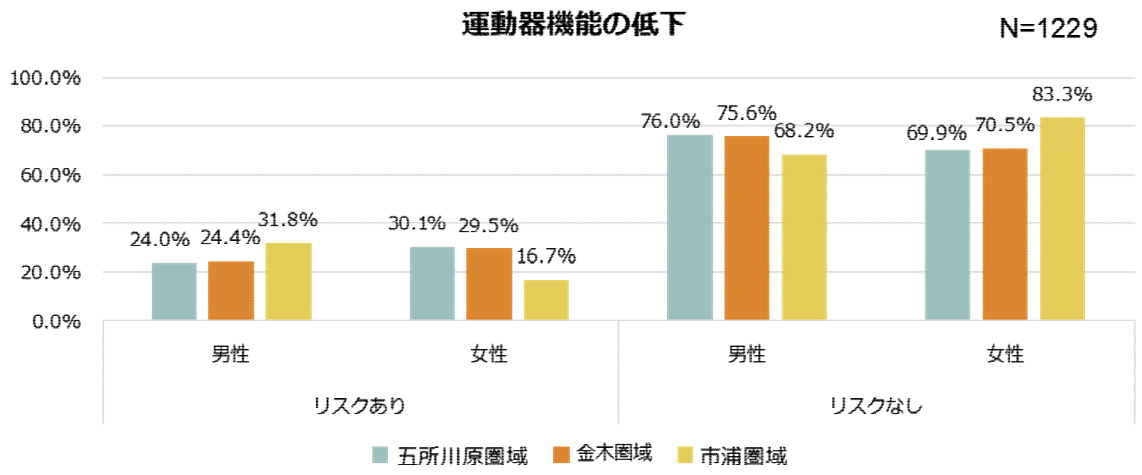


	大変苦しい		やや苦しい		普通		ややゆとりがある		大変ゆとりがある	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
五所川原圏域	11.7%	9.6%	28.8%	27.6%	54.8%	59.5%	4.1%	3.1%	0.6%	0.1%
金木圏域	8.7%	11.7%	31.1%	23.4%	58.4%	59.8%	1.9%	4.2%	0.0%	0.9%
市浦圏域	14.0%	11.1%	34.9%	20.4%	51.2%	66.7%	0.0%	1.9%	0.0%	0.0%

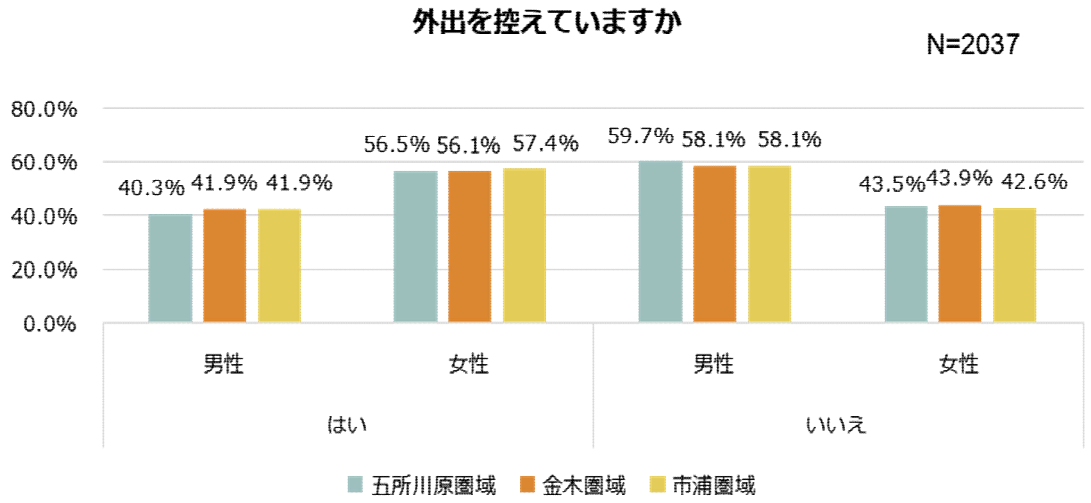
現在の住まい　N=2049



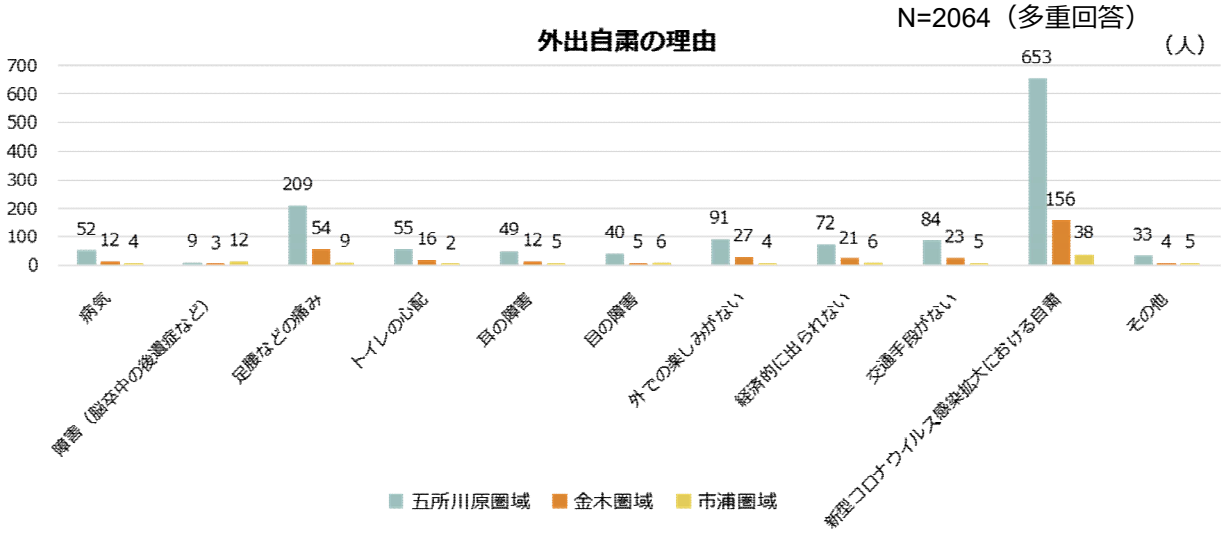
	持家（一戸建て）	持家（集合住宅）	公営賃貸住宅	民間賃貸住宅（一戸住宅）	民間賃貸住宅（集合住宅）	借家	その他
五所川原圏域	85.2%	0.4%	5.3%	1.0%	2.9%	2.1%	3.2%
金木圏域	89.6%	0.5%	5.1%	0.0%	1.3%	1.3%	2.1%
市浦圏域	94.8%	0.0%	1.0%	0.0%	1.0%	1.0%	2.1%



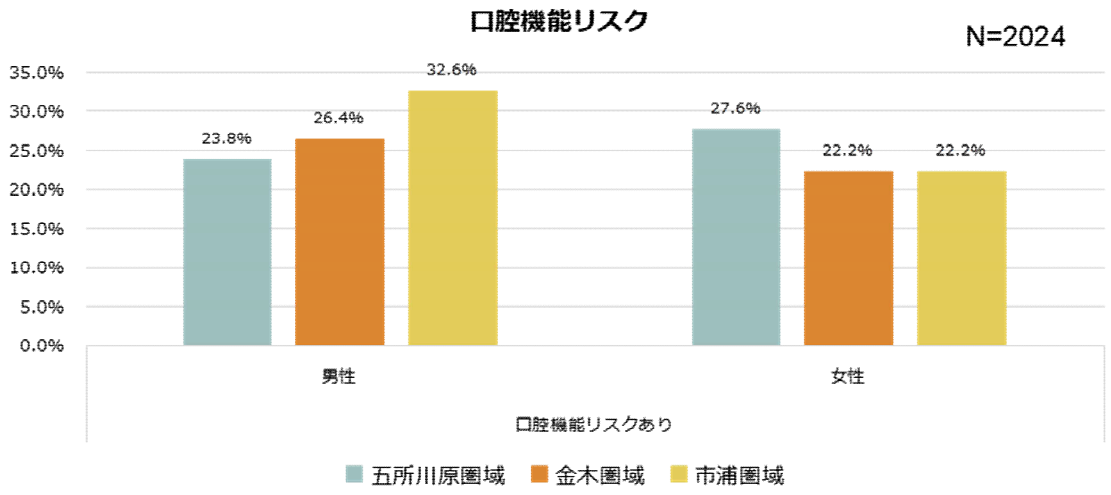
運動器機能の低下は、男性では市浦圏域、女性では五所川原圏域が 3 割を超えていた。



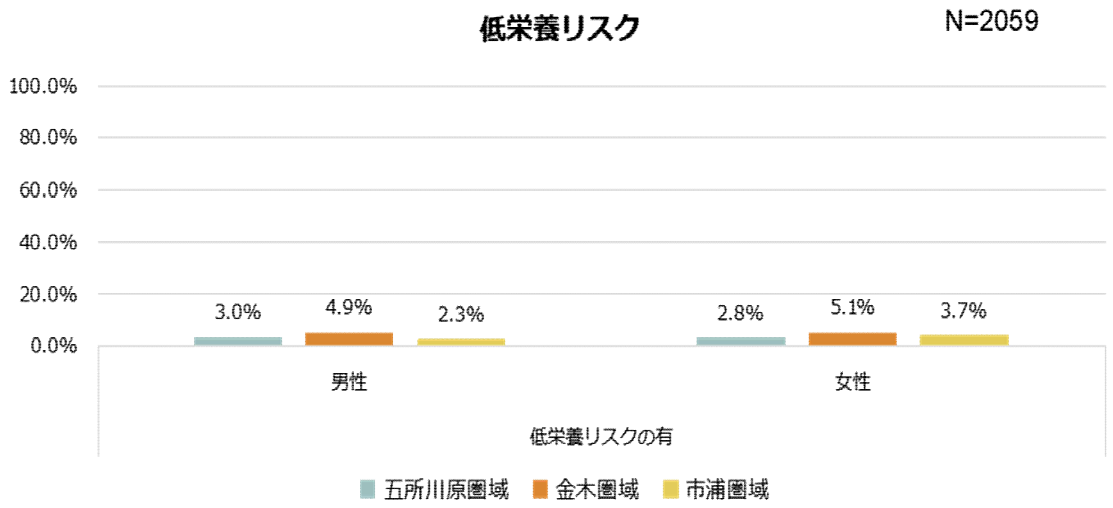
女性の半数以上が外出を控えていた。



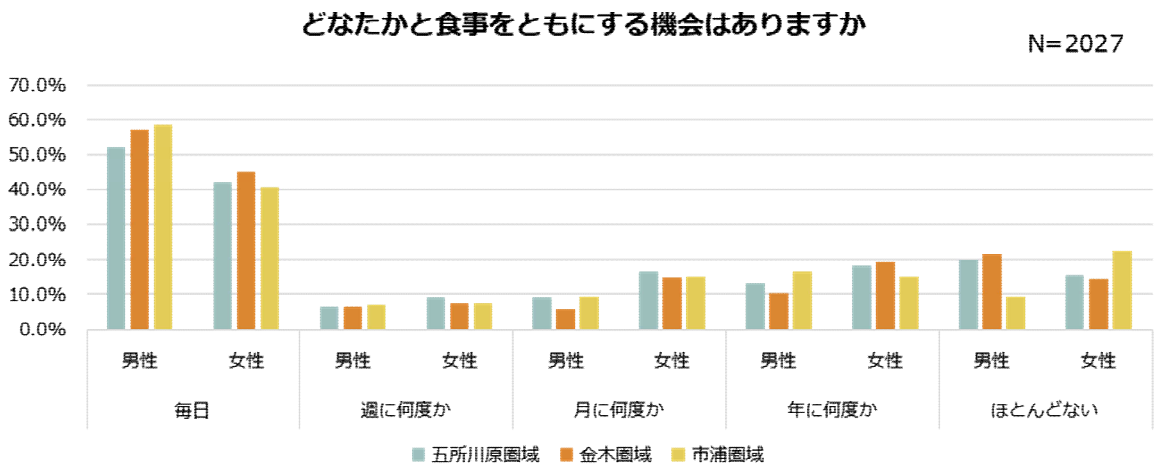
外出自粛の主な理由では、新型コロナウイルス感染症拡大による自粛が多かった。



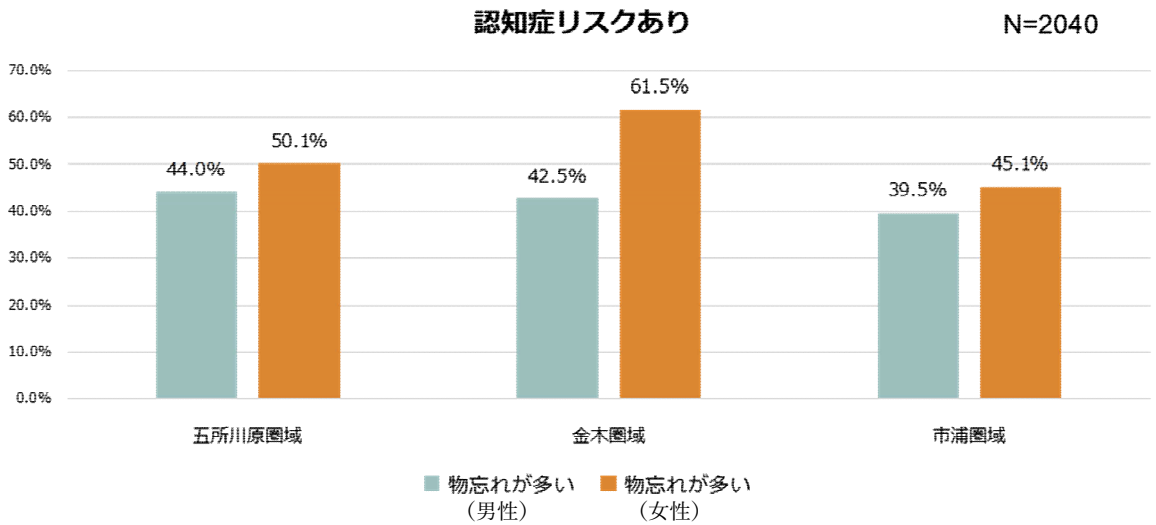
口腔機能リスクは男性で市浦圏域、女性は五所川原圏域で高かった。



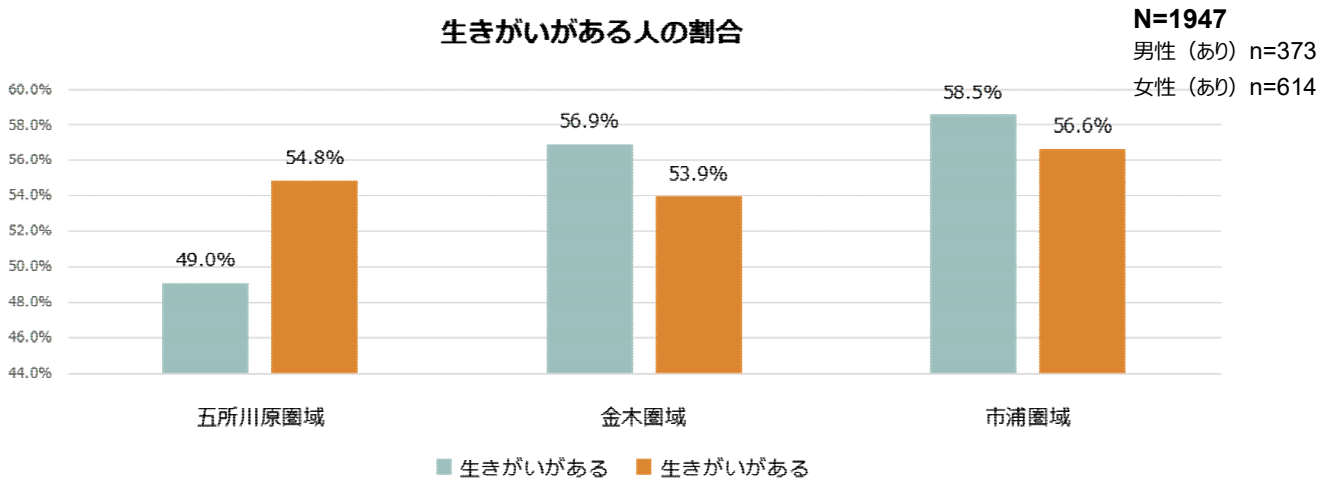
低栄養リスク者は 2~5%であった。



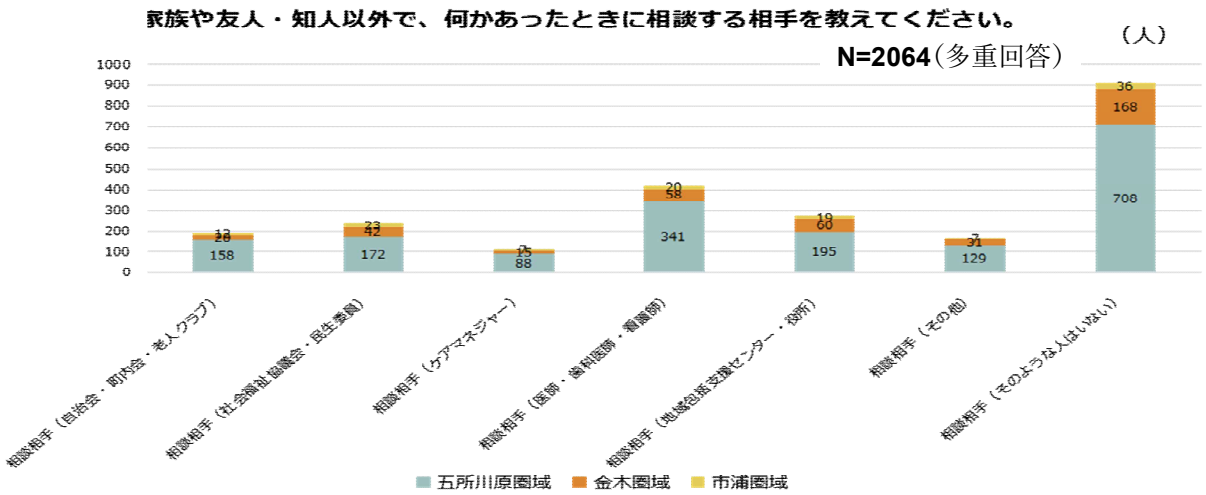
どなたかと食事を年に何度かともにする人、ほとんどない人合わせて約 4 割であった。



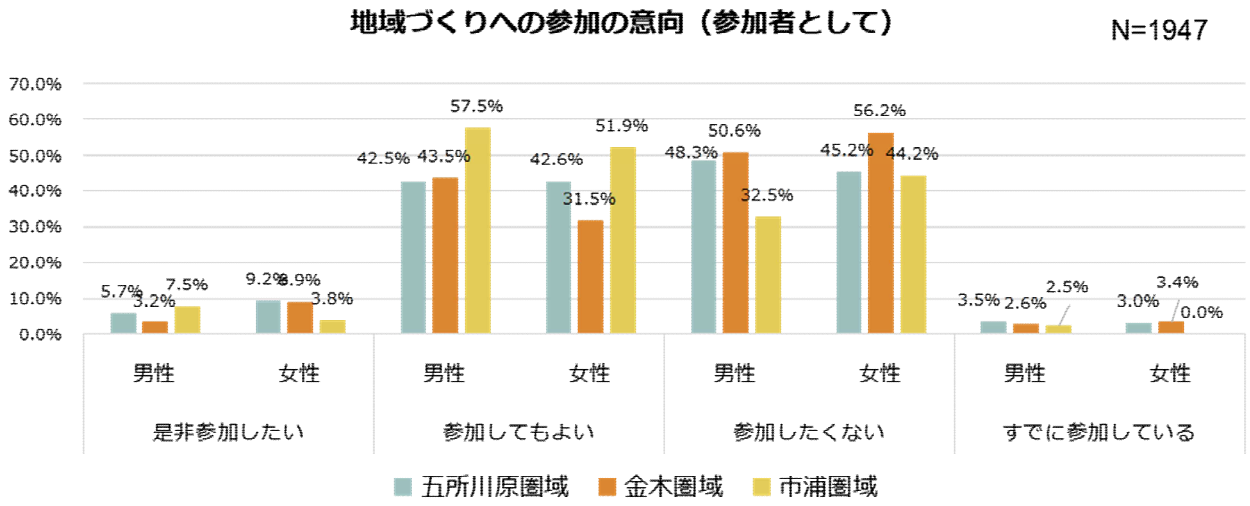
認知症リスクは女性に多く、金木圏域では女性の６割を超えていた。



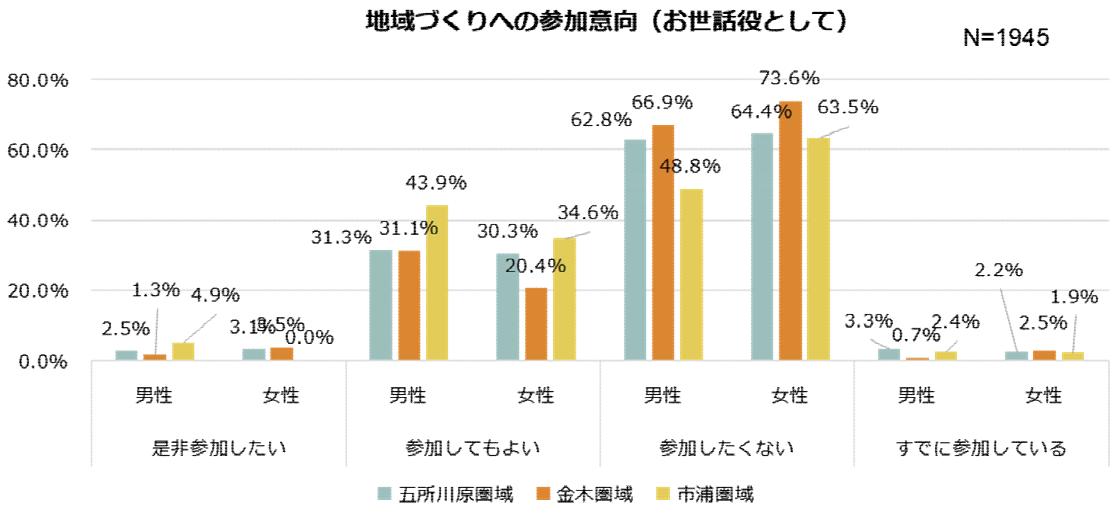
生きがいがあると回答した方は約半数で、五所川原圏域では女性、金木・市浦圏域では男性が多かった。



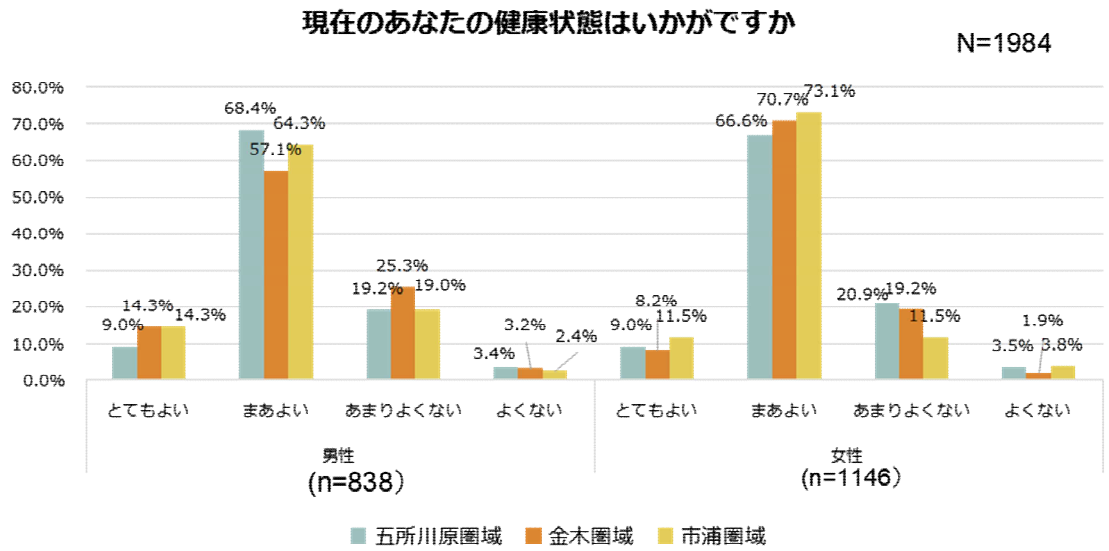
家族や友人、知人以外の相談相手として、医療従事者が多かった。



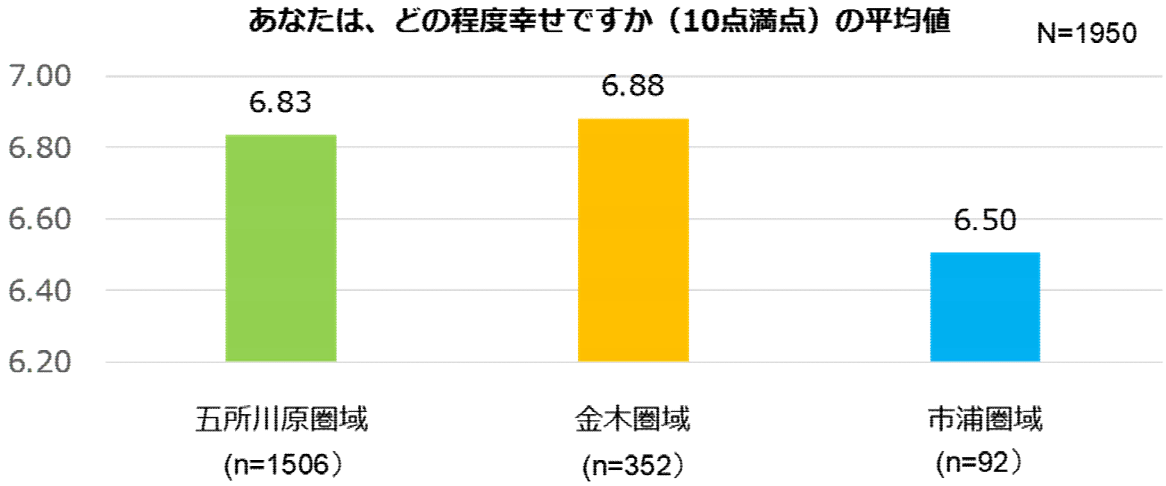
約半数の方が地域づくりへの参加意向を回答していた。

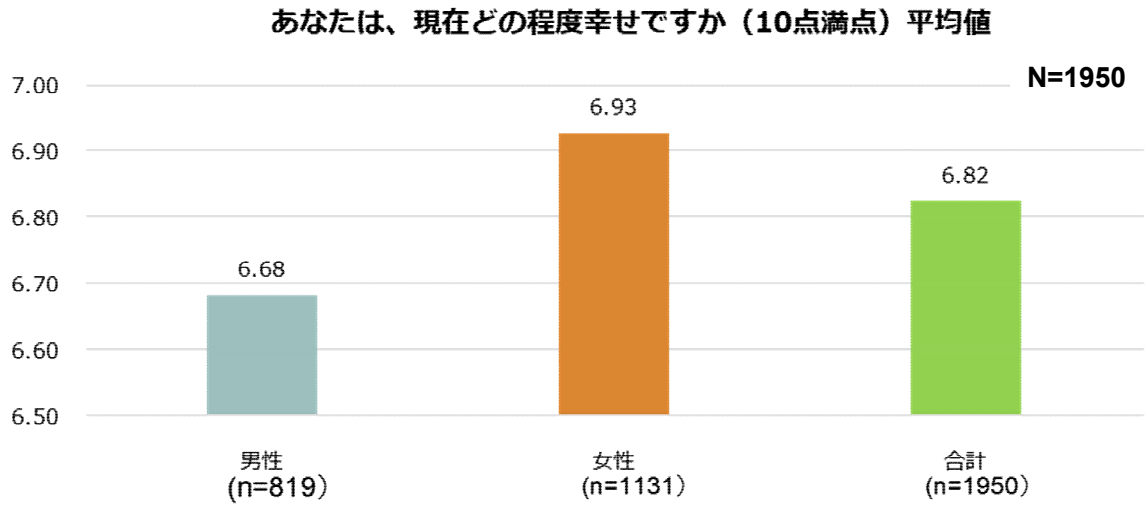


約３～４割の方は、地域づくりへお世話役として参加してもよいという回答をしていた。

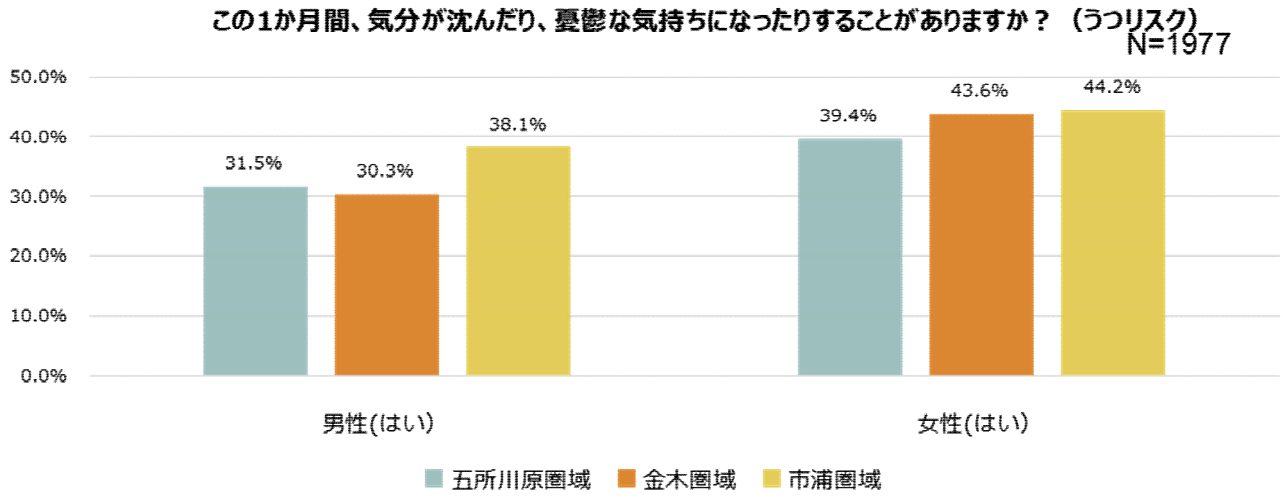


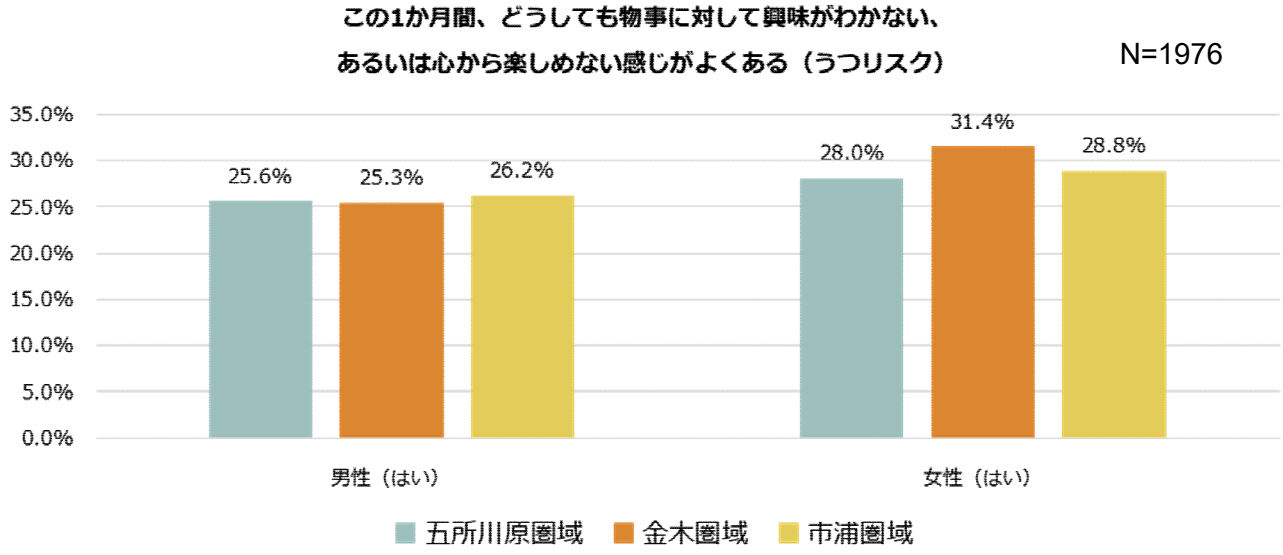
約６～7 割の方が現在の健康状態について「まあよい」、約２割が「あまりよくないと」と回答していた。



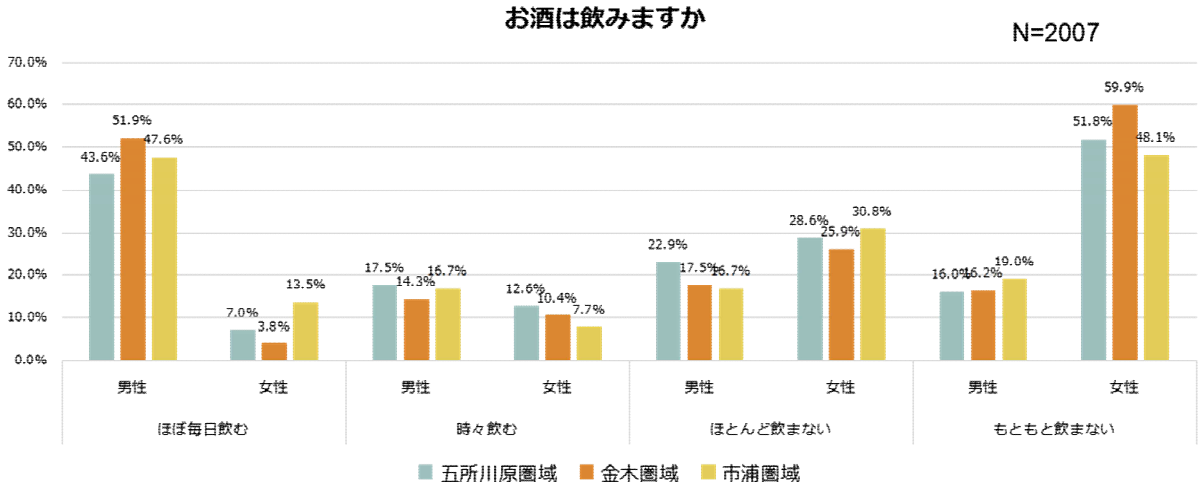


幸福度については、圏域で金木圏域で高く、性別では女性の方が多かった。

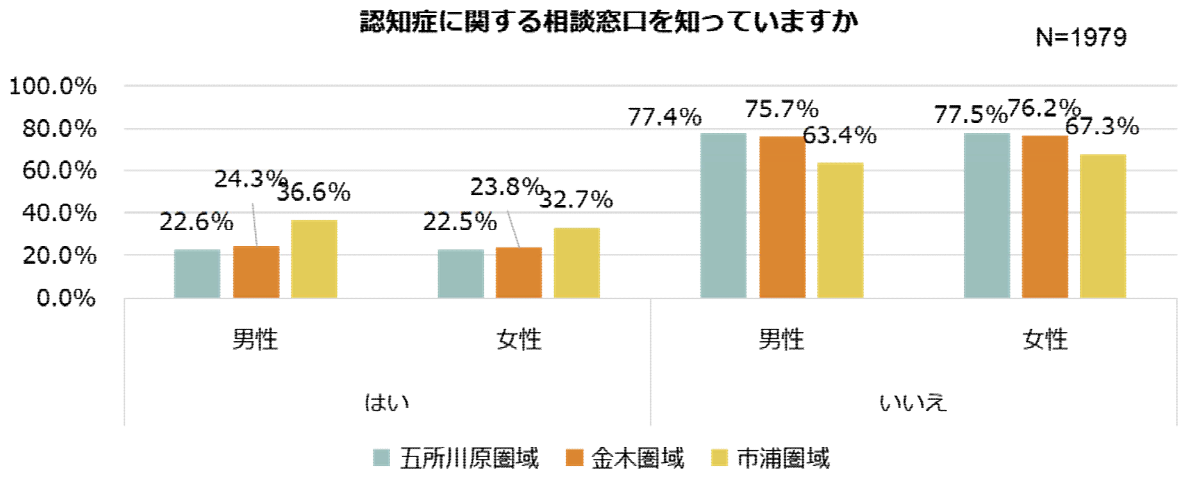




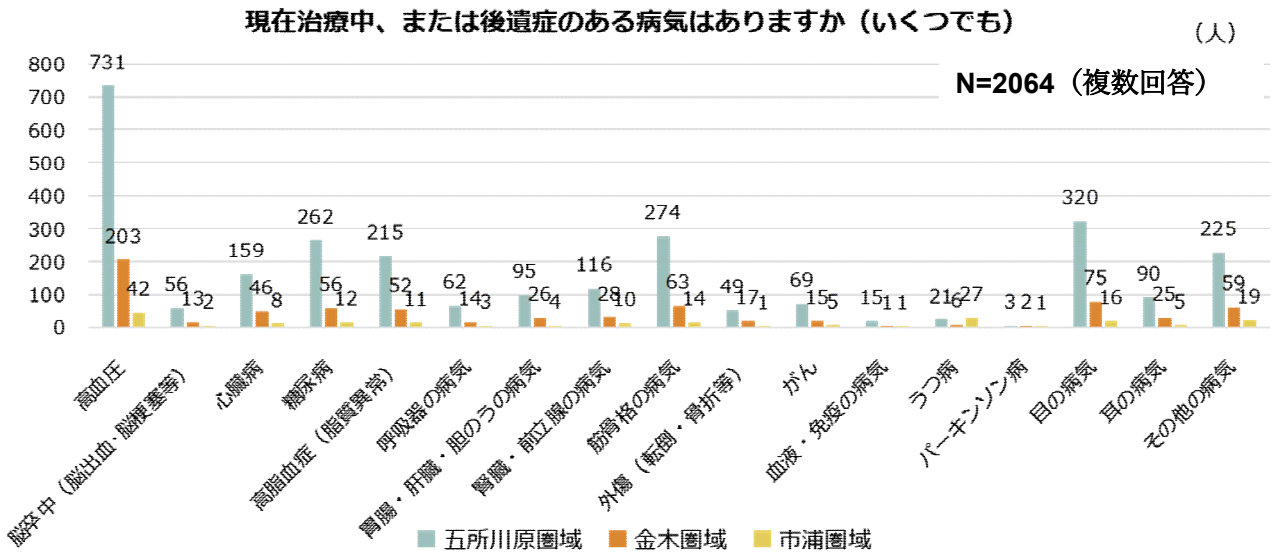
約２割~４割の方にうつリスクが認められ、男性より女性で高い傾向にある。



男性の約半数の方がお酒を飲むと回答していた。



認知症に関する相談窓口を知っている方は、全体の２～３割であった。



高血圧、目の病気、筋骨格系、糖尿病で治療されている方が多かった。

（１）市全体のリスク高齢者の割合の状況

「認知症」、「うつ」、「咀嚼機能」の順でリスク高齢者の割合が高くなっている。

（２）圏域別の特徴

①五所川原圏域

スポーツ関係のグループやクラブ、趣味関係のグループへの参加割合が他の圏域に比べ高くなっている。

手段的サポートをくれる相手・与える相手がいる者の割合が他圏域に比べ低くなっている。

②金木圏域

他圏域に比べ、「認知症」の割合が最も高くなっており、「運動機能」「咀嚼機能」「IADL（生活能力）が低い」「転倒」の項目でも高くなっている。

配食・買い物ニーズありの高齢者の割合が高く、介護が必要な高齢者の割合も他圏域に比べ高くなっている。

③市浦圏域

リスク高齢者の割合は、「閉じこもり」「うつ」「認知症」の順に高くなっている。他の圏域に比べ、「閉じこもり」「うつ」の割合が最も高くなっており、その他のリスク高齢者の割合は他圏域より低くなっている。

ボランティア等、学習・教養サークルに参加している高齢者の割合が高く、地域づくりへの参加意向や地域づくりへの企画・運営としての参加意向のある高齢者割合が他圏域より高い。情緒的・

手段的サポートに関する項目は全て他圏域より高い割合となっている。

（3）前年度との比較

①運動器機能、栄養改善、咀嚼機能、閉じこもり、認知症、うつ、IADL（生活能力）、転倒のリスク高齢者割合の前年度との比較

五所川原市全体では、「栄養改善」「咀嚼機能」「閉じこもり」「認知症」「IADL（生活能力）が低い」の 5 項目でリスク割合が上昇、「運動器機能」「うつ」「転倒」の 3 項目で割合が低下していた。上昇していた項目のうち、「IADL（生活能力）が低い」の項目が前年度と比較して最も上昇し、次いで「閉じこもり」となっていた。

低下していた項目のうち、「運動器機能」の項目が前年度と比較して最も低下し、次いで「転倒」となっていた。

金木圏域では、「うつ」の項目が上昇、「閉じこもり」の項目が前年度と比較して低下し、その他の項目では市全体と同じ変化であった。他圏域に比べ、「認知症」のリスク高齢者割合が 52.5%と最も高くなっていった。

市浦圏域では「うつ」の項目が上昇、「栄養改善」「咀嚼機能」「認知症」「IADL（生活能力）が低い」の項目が低下し、その他の項目では市全体と同じ変化であった。他圏域に比べ、「閉じこもり」のリスク高齢者割合が 46.4%と高くなっていた。

②各種サークルやボランティア活動、地域づくりへの参加意欲割合の前年度との比較

五所川原市全体では、ボランティア等、趣味関係のグループ、学習・教養サークル、地域づくりへの参加意向のある高齢者の割合が上昇、スポーツ関係のグループやクラブ、地域づくりへの企画・運営（お世話役）としての参加意向のある高齢者の割合は低下していた。

圏域別にみると、五所川原圏域ではすべての項目で前年度と比較して上昇していた。

金木圏域では、ボランティア等、学習・教養サークルの参加割合は上昇、その他は低下していた。

市浦圏域では、趣味関係のグループ以外の項目で上昇していた。

③情緒的・手段的サポートをくれる相手、与える相手がいる者の割合の前年度との比較

五所川原市全体で低下していた。

（４）認知症にかかる相談窓口の把握について

認知症の症状がある又は家族に認知症の症状がある人がいる割合は 11.3%、金木圏域が 12.7%で最も高かった。認知症に関する相談窓口を知っている割合は 23.4%、市浦圏域が 34.4%で最も高かった。

１０　考察

市全体のデータとして、「認知症」、「うつ」、「咀嚼機能」のリスク高齢者の割合が全体の約 40%を占めており、特に金木圏域では「認知症」、市浦圏域では「うつ」「閉じこもり」リスク高齢者が大きく上回っていたことから、地区ごとの対策を検討する必要がある。

令和 3 年度は令和 2 年度に引き続きコロナ禍であったが、市全体の「運動機能」「うつ」「転倒」のリスク高齢者割合が低下し、ボランティアや趣味、学習・教養サークルに参加している割合が微増、制限のある中でもできる範囲の活動を再開・継続している様子が推測された。

一方、情緒的・手段的サポートをくれる・与える相手がいる者は前年度より減少しており、コロナ禍による人との関わりが減少している影響が結果にも反映されている可能性がある。特に、前年度との比較で「IADL（生活能力）が低い」「閉じこもり」のリスク高齢者割合が増えいていることから、コロナ禍による外出機会の減少や様々な活動制限により、身体的なリスクだけでなく、IADL（生活能力）の低下にも影響していると考えられる。

１１　結論

コロナ禍の長期化により、身体的リスクだけでなく、IADL（生活能力）にも影響が及んでいることがみえてきたため、感染症対策を講じながら各地域に高齢者が通える場（通いの場）づくりの推進は今後も重点を置いて継続していく必要がある。

五所川原圏域、金木圏域では認知症リスク、市浦圏域ではうつ、閉じこもりリスクが課題であるため、市で行っている「もの忘れ検診」の受診機会を増やしたり、介護予防事業の周知・社会参加の場の情報提供、活動支援を各地区の住民をうまく巻き込みながら推進していく必要がある。

本調査は、対象者が無作為抽出であるため、分析の解釈には留意する必要があるが、圏域ごとの高齢者ニーズを把握できるため、今後も事業評価や高齢者施策に反映していきたい。